

物語世界への没入体験

—— 読解過程における位置づけとその機能 ——

小山内 秀 和 ・ 楠 見 孝

京都大学／日本学術振興会

京都大学

Immersion in the narrative world:

A review of conception and function in the reading process

Hidekazu OSANAI and Takashi KUSUMI

Kyoto University,
Japan Society for the
Promotion of Science

Kyoto University

When reading narratives, readers may have various experiences such as focused attention on reading activity, vivid images of the narrative world, and/or empathy with the characters in the narratives. Many theorists and researchers have suggested the existence of these experiences and have referred to them as absorption, engagement, or transportation. However, these constructs differ widely in what experiences each concept indicates. Furthermore, it is unclear what roles these narrative experiences play in the reading process. In this paper, we first reviewed the literature on these narrative experiences and conceptualized them as immersion in the narrative world, which comprises six homogeneous subgroups of experience. Next, to discuss the function of the immersion in narrative reading, two theoretical models of narrative immersion in the reading process were examined. Finally, we proposed a narrative immersion-reading model and suggested future directions for the studies on narrative reading, especially on embodied cognition, the situation model in narrative comprehension, and the effect of narrative reading on social abilities.

Key words: narrative comprehension, narrative reading, situation model, empathy, transportation

キーワード: 物語理解, 物語読解, 状況モデル, 共感, 移入

1. 序 論

1-1 は じ め に

小説や文学作品などの物語を読むとき、我々はその内容をただ理解するだけでなく、感情生起をはじめとしたさまざまな経験をする。その経験には、読みながら物語の情景を生き生きとイメージし登場人物に共感することで積極的に物語世界へと入り込み、物語の世界をさながら現実の世界であるかのように感じるといった体験をしばしばともなう。そしてそれは時として、作品とその登場人物とに世界や人間の本質を見出すといった体験にもつながることがある。こうした体験の存在は

古くは平安時代から知られていたことが文学作品などから垣間見ることができるが（例えば、與謝野, 1971）、心理学の領域においてはこうした体験は Nell (1988) が論考を加えたのをはじめとして、“absorption” (Tellegen & Atkinson, 1974) や“reading involvement” (Baum & Lynn, 1981; Fellows & Armstrong, 1977), “Transportation” (Green, 2004; Green & Brock, 2000) など、これまで様々な用語で記述され、また理論的な論考や実証的検討も多く行われてきた。さらに近年では、物語を読むという行為やその世界に入り込むという体験が、個人の態度変化や対人スキルの獲得などにおいて大きな役割を果たしていることが指摘されるなど (Green, 2004; Green & Brock, 2000;

Kidd & Castano, 2013; Mar & Oatley, 2008; Mar et al., 2006; Mar, Oatley, & Peterson, 2009), 心理学や文学, コミュニケーション学などの領域において物語に対する注目が集まってきている (Bortolussi & Dixon, 2003; Oatley, 2011; Sanford & Emmott, 2012; Zunshine, 2006)。そこで本論文では, 文章とりわけ物語の読みに焦点を当て, 読者が物語を読む行為とその内容とに集中し物語世界に入り込むという体験を「物語世界への没入」と定義し, これについてこれまで明らかになってきた知見を整理する¹⁾。その上で, 読解過程における物語への没入体験の位置付けとその機能について考察を行う。

1-2 物語理解と物語読解

文章として呈示された物語へ没入するという体験の基底はとりまなおさず物語を読むという行為であり, その過程は物語世界を理解するところから始まる。そこで本節ではまず読者が物語をどのように理解しているのかという問題について概観する。その前提として, 本論文で用いる「物語理解」と「物語読解」の定義づけを行う。

物語を読むという行為において内容を理解する過程は, これまで「物語理解」(narrative comprehension; discourse comprehension; story comprehension) として研究が行われてきた (たとえば, Graesser, Mills, & Zwaan, 1997; Olson & Gee, 1988)。これは, 1970 年代の物語文法 (story grammar: Thorndyke, 1977) や物語スキーマ (story schema: Bower, Black, & Turner, 1979; Mandler, 1982; Mandler & Johnson, 1977) といった研究から始まったものであり, 読者が物語文章を読んだときにその内容がどのように記憶表象として構築されるかを扱ってきた。本論文では物語を読みながらその世界に没入するという体験を扱うが, これを考察するには上述した物語理解だけでなく, これまで「鑑賞」(坂本, 1971) と呼ばれてきたような物語への認知的, 情動的反応, あるいは

後述するような自己変容体験 (Kuiken, Miall, & Sikora, 2004; Miall & Kuiken, 2002) や読者のテキスト受容 (Iser, 1976 轡田訳, 1982) といった文学的体験なども含めた, 幅広い過程としての「読み」を捉えていく必要がある。そこで本論文ではこうした過程を「物語読解」と捉え, これに基づいて読解時に生起する現象としての没入について考察を行う。

1-3 状況モデルと物語世界

物語読解において, 物語理解はその中心となる過程と考えられる。物語理解の過程では読者はその文章に関する表象を構築していると考えられるが, この時構築される表象は単一のものではなく, 文章そのものの表象と物語の構造やその現実性などとはそれぞれ別個の表象として構築される (Nell, 1988; Oatley, 2002)。とりわけ後者については, 読者は文章によって描写された状況に関する表象を構築しており, それらは前者の文章表象と連動して構築されている (Zwaan & Radvansky, 1998)。これらはメンタルモデルまたは状況モデルと呼ばれ (van Dijk & Kintsch, 1983; Johnson-Laird, 1983; Zwaan, Langston, & Graesser, 1995; Zwaan, Magliano, & Graesser, 1995), 語彙など文章の表層的情報, テキストに基づく表象と並んで文章理解過程を支えている (van Dijk & Kintsch, 1983; Graesser, Singer, & Trabasso, 1994; Zwaan & Radvansky, 1998)。

状況モデルの理論にはこれまでに様々な理論が提唱されている。代表的なものとしてはイベントインデックスモデル (Zwaan, 1999b; Zwaan, Langston et al., 1995; Zwaan & Radvansky, 1998) や共鳴モデル (O'Brien & Myers, 1994), コンストラクショニスト理論 (Graesser et al., 1994) などがあり, またこれらの理論を統合的な枠組みに位置づける試みもあるが (たとえば, 井関, 2004), これらの中で最も研究が多く行われてきている理論の一つとしてイベントインデックスモデルを挙げることができる。このモデルの大きな特徴として, 物語内容に関する状況次元が設定されていることが挙げられる (Radvansky, 2012; Zwaan & Radvansky, 1998)。すなわち, 読者は物語に記述された時間, 空間, 出来事の因果関係, 登場人物 (または主人公), 目標といった情報を収集し, そ

1) 「没入」という用語に関連して, 臨床心理学では「自己没入」(self preoccupation) という概念が提唱されている (坂本, 1997; Sakamoto, 1998)。これは抑うつに関連する個人特性であり, 自己への注意や注目が持続しやすい傾向を示すものであるが, 本研究で取りあげる物語世界へ入り込む現象としての「没入体験」はこれとは全く異なる概念である。

それぞれの次元ごとにモニターしていると仮定されている (Zwaan, Langston et al., 1995; Zwaan & Radvansky, 1998)。こうした次元で構成される状況モデルは現実世界の知覚と類似した知覚的なものであり (常深・楠見, 2009; Zwaan, 1999a), またそれらは現実世界と同じかあるいは類似した「物語世界」(narrative world または story world) であると捉えることができる (Busselle & Bilandzic, 2008; Segal, 1995)。ここでいう物語世界とは、物語に記述された状況や出来事について読者が構築する表象であり、それらは現実世界についての表象と類似した特徴を持つ (Busselle & Bilandzic, 2008; Mar & Oatley, 2008; Oatley, 2011)。読者は物語に描写された時間や空間といった設定が現実世界と同様に矛盾なく構築されていることや、登場人物が現実世界の人間と同じように認識し、感情を抱き、行動する存在であるという前提に従って物語世界を構築していくとされ、このため物語は現実の社会的経験のシミュレーションとして機能すると指摘されている (Mar & Oatley, 2008; Oatley, 1999)。次節以降ではこの「物語世界」に入り込む体験としての没入と、それに近接した諸概念について検討する。

2. 物語読解における没入体験

本節では物語読解にともなう没入の定義とその指し示す内容について論ずる。冒頭でも触れたように、物語世界に入り込む体験は古くから極めてよく知られた現象であった。また物語は説明文とは異なり楽しみながら読むこと (ludic reading) が多く、そうしたときには本にのめり込む体験はとても重要な要素である (Nell, 1988)。また没入は読書への興味や内発的動機づけの構成要素とされており、読書活動や文章理解との関連が検討されている (たとえば, Greaney & Newman, 1990; Schiefele, 1991; Wigfield & Guthrie, 1997。レビューとして Schiefele et al., 2012)。さらには状況モデル理論の見地からも、例えば主人公のおかれた状況がどのようなものかを想像し、主人公とともにその環境内を移動したり主人公の知覚を疑似体験したりするなど、時に豊かな物語表象を構築し、その世界に入り込むような体験をすることが指摘されている (Zwaan, 1999a)。しかしなが

ら、先行研究によってこれまでにさまざまな形で没入現象への言及がなされてきたが、それら諸理論では用語もその指し示す概念も一貫しておらず²⁾、それらが示す概念の関係性も十分に整理されているとは言い難い。そこで本節では、没入現象に関するこれまでの理論について論ずる。まず心理特性としての没入性に触れ、次いで読みへの没入に関する初期の研究と近年の物語への移入仮説、没入に類似した現象であるフロー体験、物語メディアに関する学問領域での没入研究を順に概観する。その後でより統合的な枠組みから物語読解における没入の概念を整理し、本論文における「物語世界への没入」現象の定義とその射程とを明らかにする。

2-1 催眠感受性と没入

まず、そもそも何かに入り込む、あるいはのめり込む現象とはどのように定義されるのだろうか。外的対象や思考に入り込む体験は1960年代から80年代前半にかけて、催眠誘導への反応性や親和性を表す「催眠感受性」(hypnotic susceptibility) あるいは「被暗示性」(suggestibility) を予測する心理特性として検討されてきた。

没入性とその近接概念 人間の心理特性としての「没入性」(trait absorption) は Tellegen and Atkinson (1974) によって提唱された概念である。Tellegen らは催眠感受性を予測する尺度として71項目の調査質問紙を作成し、因子分析の結果得られた3因子のうち一つの因子を「没入性」と名づけた。Tellegen らによると没入は、ある特定の注意対象を体験しまたそれをモデル化することにすべての表象機能が用いられてしまう状態とされており、風景、音楽、人間、過去の記憶などの表象に全ての注意が向けられる傾向と記述される (Roche & McConkey, 1990; Tellegen & Atkinson, 1974; Wild, Kuiken, & Schopflocher, 1995)。一方、催眠感受性に関連するとされる心

2) 本論文で取りあげる先行研究では、没入現象を示す用語には absorption, being lost, engagement, involvement などがあり、類似してはいるが研究者間で異なった用語が用いられている。一方、それぞれの用語のわが国における定訳は定まっていない。そこで本論文ではそれぞれについて、邦文文献を参照しつつ、できる限り原語の意味を反映するように訳語をあてることとする。

理特性はこれ以外にも提唱されている。例えば Hilgard (1965) は催眠感受性の高い人の事例を元に面接調査を行い、感受性の高い人の特徴として (a) 感覚体験への高い親和性、(b) 子ども時代の高い空想能力、(c) 読書やドラマへの没入などを見出し、「イメージへの没頭」(imaginative involvement) と名づけた。また Wilson and Barber (1983) は被催眠性の高群と低群に面接調査を行った結果、高群の多くが豊かな空想を体験しており、低群に比べて体外離脱体験やテレパシーといった現象とも親和性が高いことを明らかにした。Wilson らはこのようなパーソナリティ特徴を「空想傾向」(fantasy proneness) と呼び、これらが催眠感受性と強く関連することを指摘している。

没入性の測定 没入性やそれと近接した概念は、これまでにそれぞれ質問紙によって測定する試みがなされてきた。没入性については Tellegen and Atkinson (1974) が、イメージへの没頭は Davis, Dawson, and Seay (1978) が、また空想傾向は Merckelbach, Horselenberg, and Muris (2001) がそれぞれ測定尺度を作成しているが、この三つの概念はいずれもイメージへの没入傾向を指すという点で同じものであると指摘されている(大宮司・芳賀・笠井, 2000)。これらの質問紙には小説やドラマ、映画などの作品世界への没入を問う項目が含まれているが、没入性や空想傾向、イメージへの没頭などは、物語を含めた空想世界への注意の集中と外界に対する意識の減少または一時的消失を中心とした概念と捉えることができるだろう。

読みへの没入に関する実験的検討 上述したような催眠感受性研究に関連して、初期には読解にともなって生じる物語世界への没入が「読みへの没頭」(reading involvement) と呼ばれ実験的検討がいくつか行われた。たとえば Fellows and Armstrong (1977) は、事前に行った被暗示性テストによって参加者を高得点群と低得点群に分け、短編小説を読んでもらった。そして、読解時に生じた没頭体験として情景のイメージ化、登場人物への同一化、外界への気づきの消失、物語への批評的思考の停止など7項目の尺度に回答してもらった。その結果、被暗示性高群は低群よりも物語に没入したことが示され、またこの没頭得点と同じ尺度で普段の読書時について評定してもらっ

た得点との相関は、被暗示性高群において有意となった。一方 Baum and Lynn (1981) は、参加者が物語を読んでいる間に音刺激を呈示し、被暗示性の高群と低群で音への反応時間を比較した。その結果、行動指標である反応時間には両群に有意な差は認められなかったが、読解への集中の程度や内容のイメージなどを測定した主観指標では両者に有意な差が見られたと報告している。以上のように見てゆくと、読みへの没頭は物語への注意の集中に加えて、情景のイメージや登場人物への共感といった体験も含む概念であると考えられる。

2-2 物語への移入とフロー体験

次に、近年になって提唱された理論として、物語世界への移入仮説とフロー体験を取りあげる³⁾。この二つの概念は物語への没入現象を考える上で重要な概念であり、また両者は2-1で取りあげた没入性とも関連すると考えられる。

物語世界への移入仮説 「物語世界への移入仮説」(transportation into narrative world hypothesis) は Green and Brock (2000) によって提唱された理論である⁴⁾。Green らは、情報を語り(narratives)として呈示することが個人の態度や信念に大きなインパクトを与えること(たとえば、Chang, 2008)を指摘し、そのメカニズムとして移入という概念を提唱した。ここでいう移入とは、全ての心的システムが物語内の出来事に集中するプロセスであるとされている(Green & Brock, 2000; Green, Brock, & Kaufman, 2004)。物語を読むあいだ読者は時間の感覚を失い、自分の周囲で起きていることを知ることができなくなる代わりに、物語世界にすっかり入り込んでいるような感覚を抱く(Green, 2004)。その結果、読者は現実世界に関する知識へのアクセスが減少すると同時に物語に対する鮮明なイメージが喚起され、信念

3) transportation の訳語として、ここでは小森 (2012) に従い「移入」を用いた。

4) 「物語世界への移入」という表現は Gerrig (1993) によるものである。Gerrig は文学作品の読解を旅にたとえ、読後に自己に変化が生じていることを新しい経験を得て旅から帰ってくることになぞらえて表現している。Green and Brock (2000) はこの Gerrig の考察に沿う形で物語による個人への影響を移入という語で説明しようとしたのである。

や態度に変化がもたらされる (Green & Brock, 2002)。彼らは移入体験を測定するための1次元の尺度を開発し、移入によって態度変化が起こることを実験的に明らかにした (Green & Brock, 2000)。さらには移入の個人差を説明する概念として移入傾向 (transportability) といった特性も提唱されている (Mazzocco et al., 2010)。

物語に移入することの効果として、Green and Brock (2000) は精神障害者による殺人事件を描いた物語によって精神障害者の保護政策に対する読者の態度が変化することを示している。それ以外にも、たとえば宝くじに関する物語によってくじの購買行動への態度が肯定的に変化することや (McFerran et al., 2010)、禁煙に関する物語映像への移入が視聴者のその後の禁煙行動を予測すること (Williams et al., 2010) など、さまざまな領域で検討されている。一方で物語に移入すると読後の喜び体験や物語へのリアリティの感覚が高まると指摘されている (Green, 2004; Green et al., 2004; Tal-Or & Cohen, 2010)。このように移入に関する研究は数多く行われており、文学作品などの物語読解における現象学的体験を考える上で最も有力な理論の一つと考えられている (Busselle & Bilandzic, 2008, 2009; Green & Carpenter, 2011)。

フロー体験 没入や移入に類似した概念として「フロー体験」(flow experience: Csikszentmihalyi, 1990) を挙げることができる。フローは全ての注意が特定の行為に注がれ、自分が行っているその行為と自分とが切り離されているという感覚がなくなる状態であり、没入などとも関連の深い概念である (Wild et al., 1995)。フローが起こる対象には日常生活のさまざまな活動が含まれるが、ある活動においてフローが起こるには、その活動のレベルと行為者の能力とのバランスが取れていることが必要だと考えられており、物語読解においては一貫した意味のある物語世界の構築が問題となる (Busselle & Bilandzic, 2008)。Csikszentmihalyi 自身は読書や物語読解に対してのフローを直接的に取り上げているわけではないが、上記のことから物語読解では読者が主体的に物語世界を構築することへのフローが起こっていると考えることができる (Busselle & Bilandzic, 2008)。またフロー体験はその対象となる活動からもたらされる喜び

や楽しみと関連しており、物語読解時に感じる楽しみの重要な要素でもある (Oatley, 2011)。さらに、フロー体験は物語世界への移入とも概念的に類似することが指摘されており (Green, 2004; Green et al., 2004)、Nell (1988) のいう没入体験や物語への移入は読みながら物語世界を構築するという活動へのフローが起こっている状態という解釈もできる (Busselle & Bilandzic, 2008)。

2-4 登場人物への同一化と共感

読者が物語世界へ没入しているとき、しばしば作中の登場人物になったかのような体験をしたり、登場人物の感情を共有したりすることがある。こうした体験は没入現象の重要な側面であると考えられ、共感や感情移入、同一化などと呼ばれている⁵⁾。

登場人物への同一化 同一化 (identification) はもともと精神分析学において用いられた語であり、エディプス期における葛藤の中で親の役割をとるようになるという空想的な心的メカニズムを表すものであった (Freud, 1940 津田訳, 2007)。しかしこの語はやがて他の領域の研究者が独自の形で用いるようになり、人間が自己の同一性を抑制し、他者や物語内の人物の視点で世界を想像的に体験する現象を指すようになっていった (Bettelheim, 1976; Wollheim, 1974)。物語の登場人物に対する同一化について概念整理と定義づけを行った Cohen (2001) は、同一化を読者あるいは聴衆と登場人物との相互作用の結果生じる現象であるとし、読者はこのとき自分の同一性を登場人物のそれと置き換え、自分が読者であるという意識が薄れて一時的に登場人物として作中の出来事を体験するようになる論じた。Cohen は同一化体験を測定するツールとして10項目からなる尺度を提案しているが、一方で同一化が模倣などをはじめとする他の概念との区別が難しいことを指摘している。Tal-Or and Cohen (2010) は物語への移入と登場人物への同一化が同時に生じ

5) 同一化と共感との間には、前者では読者が登場人物に完全になりきってしまうのに対して後者では読者が自身と登場人物と区別を保っているという相違がある (Keen, 2006; Oatley, 1995) が、本論文では感情移入との相違を重視して両者を同一のカテゴリーとして扱う。

ることが多いことから、読者に事前に与える情報を用いて両者を個別に操作する実験を行った。その結果、事前に主人公の過去やポジティブな側面の情報が与えられると同一化が促進され、未来に関する情報が与えられると移入が促進されることを示した。このことは移入と同一化が同時に生じてはいてもそれぞれ異なる過程を有していることを示唆している。しかしながら両者は全く独立しているわけではなく、同一化が移入と同様に読者の態度を変化させることが指摘されている (de Graaf et al., 2012)。

共感と感情移入 読者と登場人物との関係については、共感や感情移入という語で説明されることも多い。没入している読者と登場人物とは認知的、情動的につながった状態にあると考えられるが (Cohen, 2001; Gerrig, 1993; Oatley, 1999; Tal-Or & Cohen, 2010), 同一化が前述したように視点取得といった認知的側面を重視するのに対し、共感や感情移入は情動的側面を重視していると考えられる。

物語を読むことで読者に情動的反応が生じることは数多く指摘されているが (Greaney & Newman, 1990; 佐々木, 1998; van der Bolt & Tellegen, 1996), 登場人物に対する読者の感情は「共感」(empathy) や「感情移入」(sympathy) と呼ばれることが多い。この二つの語はしばしば同じ意味を示すことがあるが、両者が異なっているとする理論も存在する。その場合、共感とは登場人物の心情をそのまま読者が感ずることを示すのに対し、感情移入は出来事や登場人物に対する読者自身の感情反応を示すと区別される (Braun & Cupchik, 2001; Cohen, 2001; Coplan, 2004; Kneepkens & Zwaan, 1994; Oatley, 2002)。たとえば Braun and Cupchik (2001) は、この二つを読者の物語に対する美的距離の違いとして説明する。すなわち、物語に対する距離が近い読者は一人称的な視点 (登場人物の視点) を取ることで共感的に読むが、物語との距離が遠い読者は二人称または三人称的な視点を取ることで、出来事やエピソードそのものに対する読者自身の感情を体験する傾向があるという。この理論に従うならば、Cohen (2001) のいう同一化を体験している読者は共感的な感情を経験しているといえることができるだろう。

読者が体験する共感とは読解においても一定の役割を果たしていることが示唆されている。Miall (1988, 1989) は、文学作品を読むときに読者が体験する感情には三つの役割があるとしているが、そのうちの一つに自己準拠性を挙げている。これは読者が物語の内容を自身の体験や記憶と結びつけ、登場人物に同一化してその感情に共感することで物語の理解が深まることを指す。この指摘について実験的に検討した米田・仁平・楯見 (2005) は、一度最後まで読んだ物語を再度初めから読ませると、再読の際には主人公について記述した文において共感が高まることを示し、読者が体験する共感とは特に主人公の理解と関連すると指摘している。さらに、主人公の感情についてイベントインデックスモデルに準拠した検討を行った Komeda and Kusumi (2006) は、主人公に共感しながら読むようにと教示すると状況モデルがより詳細に構築されることを示している。

2-5 没入概念の整理

以上、物語への没入現象に関してこれまでに提唱されてきた理論を概観してきたが、これらの理論は相互に関連する現象を扱っていたり、その指し示す内容が重複していたりするものが多く含まれているように思われる。そこで本節ではこれら諸理論を整理し、より統合的な観点から没入の全体像を描出することを試みる。

没入現象を包括的に捉える試み 没入に対するアプローチはさまざまな領域から行われてきたが、物語への没入傾向を統合的に測定する研究も行われてきた。Miall and Kuiken (1995) は文学理論とりわけ読者反応論 (たとえば, Iser, 1976 轡田訳, 1982) などを概観しながら、これまで読者が物語に接したときの反応や体験を測定する尺度はほとんど作成されていないと指摘し、個々の物語への没入ではなく没入の特性的側面を測定する尺度として 68 項目からなる質問紙を作成した。文学反応質問紙 (Literary Response Questionnaire: LRQ) と呼ばれるこの質問紙は七つの下位尺度を有しており、それぞれ (a) 読解に伴って生ずる洞察, (b) 物語世界の鮮明なイメージ化, (c) 登場人物への共感, (d) 日常からの逃避や没頭としての読書, (e) 作者や文体への注目, (f) ストーリー性への注目, (g) 文学的価値の否定,

という側面の個人差を測定する。この質問紙は小山内・岡田（2011）によって日本語版が作成されており、文学的価値の拒否因子を除く六つの因子について検討が行われ、イメージの鮮明性と共感が「没入」という一つの因子にまとまったことを除いて原版と同じ因子構造を報告している。LRQ は空想傾向や没入性の尺度と相関することが報告されているほか（Miall & Kuiken, 1995; 小山内・岡田, 2011）, (c) の共感尺度は同一化を測定していると指摘されている（Cohen, 2001）。さらに移入の重要な構成要素であるイメージ化は (b) に、読書に対する注意の集中は (d) にそれぞれ下位尺度として含まれており、心理特性としての没入現象を包括的に測定しうる尺度といえるだろう。

一方 Busselle and Bilandzic (2009) は、小説や演劇、映画などさまざまなメディアの物語に触れた時のメンタルモデル構築の立場から、これまで個別に取り上げられてきた移入や同一化、物語世界のリアリティ感覚など包括的な観点から物語視聴時の状態的個人差を測定するツールとして物語関与尺度（narrative engagement scale）を作成している。この質問紙は4因子12項目で構成されており、それぞれ (a) 一貫した物語世界の把握や理解、(b) 物語への注意の集中、(c) 登場人物への共感と感情移入、(d) 現実世界を離

れて物語世界に存在する感覚、を測定するものである。Busselle らはこれを用いてドラマ視聴時の没入体験を測定し、それらが移入や同一化などの得点と高い関連を示すことを報告している。

統合的観点からの没入概念の整理 物語への没入体験は多様な側面を含む複雑な現象であると推測されるが、Busselle and Bilandzic (2009) や Miall and Kuiken (1995) などに基づくと、これらはいくつかの下位概念を含む体験として整理することができると考えられる。そこで筆者らは、これまで見てきた物語への没入を構成する下位概念を (a) 物語やその読解への注意の集中、(b) その結果としての自己や外的世界に関する意識の減退または消失、(c) 物語世界の鮮明なイメージ化、(d) 物語世界の現実感、(e) 登場人物への同一化または共感、(f) 感情移入、の六つに整理し、上述した各理論がどの範囲を取り上げているかを考察する。表1に各理論の説明範囲をまとめたものを示す。

まず、没入性（Tellegen & Atkinson, 1974）は質問紙によって測定される心理特性であり、その中核は外的、内的対象に対する注意の集中である。これは読むという行為そのものに対する集中や没頭と捉えることができるが、物語世界へのイメージ化や登場人物への同一化などは説明範囲外となる。これに対して、読みへの没頭（Baum &

表1 物語への没入体験を構成する下位概念と各理論における説明範囲

理論 (提唱者)	状態/ 特性	注意集中	自己・外的 意識の減退	物語の イメージ	物語世界 の現実感	共感・ 同一化	感情移入
没入性 (trait absorption) (Tellegen & Atkinson, 1974)	特性	◎	○	×	×	×	×
読みへの没頭 (reading involvement) (Fellows & Armstrong, 1977)	状態	◎	△	○	○	○	×
フロー体験 (flow experience) (Csikszentmihalyi, 1990)	状態	◎	○	△	×	×	×
移入 (transportation) (Green & Brock, 2000)	状態	◎	◎	◎	×	△	△
同一化 (identification) (Cohen, 2001)	状態	△	◎	×	△	◎	×
共感と感情移入 (empathy and sympathy) (Braun & Cupchik, 2001)	状態	×	×	○	△	◎	◎
文学反応 (literary response) (Miall & Kuiken, 1995)	特性	◎	◎	◎	○	◎	×
物語への関与 (narrative engagement) (Busselle & Bilandzic, 2009)	状態	◎	○	△	◎	◎	○

注1：◎は中心となる概念、○は説明あるいは測定可能、△は間接的に説明可能、×は説明範囲外。

注2：それぞれの理論は、説明範囲にある概念を必ずしも別個のものとして扱っているわけではない。

Lynn, 1981; Fellows & Armstrong, 1977) は物語読解時の一時的な心理状態を指す概念であり、注意の集中などに加えて同一化や物語世界への批判的態度の減退など広範な概念を含むと考えられる。一方フロー体験 (Csikszentmihalyi, 1990) は、ある活動に全ての注意が注がれる状態とされており、没入性と極めて類似した概念といえる。ただしフローは特定の活動に限定した心的状態を示すものであり、その点で没入性とは異なる側面を対象としているといえる。すでに述べたように、これらの概念には物語読解における体験を直接的に取りあげてないものもあるが、いずれも物語の読みにおける没入現象の根拠をなすものとして多くの理論でその基礎に据えられているといえるだろう。

次に、移入や同一化、感情移入といった概念は、物語に触れるときに読者や観衆が体験する没入状態そのものを説明する概念である (Braun & Cupchik, 2001; Cohen, 2001; Green & Brock, 2000)。しかしながら、これらの概念はそれぞれその説明範囲が大きく異なっている。まず、移入と同一化は、ともにその体験への集中と外界や自己に対する意識の減退が概念の基礎として挙げられているが、移入についてみれば、その中心概念は物語世界のイメージ化であり、これが物語による態度変化に重要な働きをすると指摘している (Green & Brock, 2002)。一方で同一化は、登場人物の視点を取得し感情を共有するという点に主眼が置かれており、イメージ化については説明範囲外である。この同一化や共感と類似した概念として感情移入という側面を挙げている研究に Braun and Cupchik (2001) があるが、この論考の力点は共感と感情移入との差異に置かれており、注意の集中や没頭といった側面については触れられていない。

最後に、物語への没入概念を広範に捉えている研究として文学反応と物語への関与の研究がある (Busselle & Bilandzic, 2009; Miall & Kuiken, 1995)。Miall らの作成した LRQ は、物語世界のイメージ化、登場人物への同一化、読みへの注意の集中と外界への意識の減退という3次元の特性を個別に測定しており、それらによって物語への現実感をも説明可能であるが、登場人物への感情移入については説明範囲外である。一方、移入や同一化といった概念を統合的に捉えようとした

Busselle and Bilandzic (2009) の尺度は、注意の集中、物語の詳細な理解と現実感、登場人物への同一化と感情移入という状態を個別に測定している。前者は特性を、後者は状態をそれぞれ測定対象としているが、現在のところこれらは最も包括的に物語世界への没入を測定できる尺度といえるだろう。

以上のように、物語への没入は実に多様な領域で個別に研究対象とされ、このため説明対象とする概念も大きく異なっていることが明らかになった。しかしながら、これまでの知見は没入現象が多様な側面を持つてはいるが、それらが相互に関連する六つの下位概念によって説明できること、そして物語に触れる個人はこれらの全てもしくはいくつかの現象を同時に体験していることを示唆している。こうした視点に立つことによって、物語世界への没入現象をより包括的かつ多次元的に検討することが可能となるだろう。

3. 物語読解過程における没入体験の位置付け

前節で示したように、物語世界への没入体験は文学やメディア論、認知心理学、社会心理学など多くの学問領域で検討が行われてきた。またこの現象を統合的に捉えようとする研究は未だ少ないものの、移入や物語への関与などいくつかの研究が影響力のある理論として注目されるようになってきた (Busselle & Bilandzic, 2009; Green & Carpenter, 2011)。しかしながら、没入体験が物語読解の過程においてどのような位置にあるのかはあまり明らかになっていない。すなわち、物語読解において没入がどのように生じ、物語理解を含む読解過程においてどのような役割を果たし、その結果生じる認知的、感情的変化とどのように関連するのかを説明する統一的なモデルは十分に構築されていない。そこで本節では、物語読解過程における没入の位置づけについて、先行研究として物語理解・関与モデルおよび自己変容感情仮説の二つを紹介し、それぞれにおける没入の役割について考察する。そして、物語理解の最も有力な理論である状況モデル理論 (Zwaan & Radvansky, 1998) と没入体験の理論を統合する新たなモデルとして、没入-物語理解モデルを提唱する。

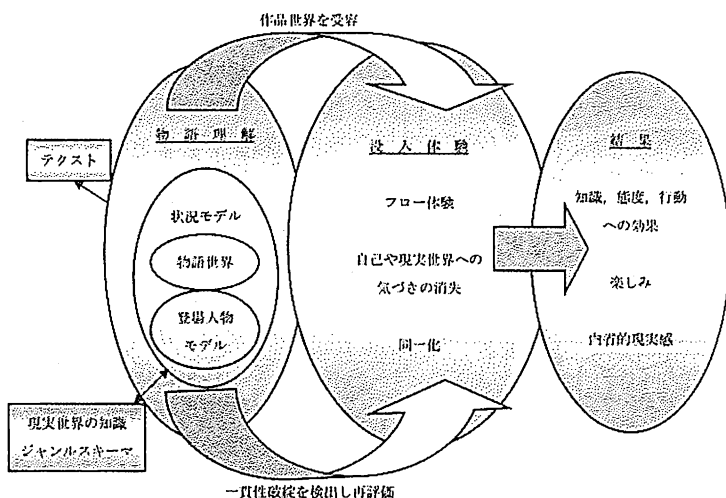
3-1 物語理解・関与モデル

モデルの概要 「物語理解・関与モデル」(Model of narrative comprehension and engagement) は Busselle and Bilandzic (2008) によって提唱されたモデルである。Busselle らは、物語に関与、すなわち没入するには物語世界に関する「現実性」(realism) を読者が適切に知覚し評価できることが重要であると指摘した。ここでいう現実性とは、物語世界が現実世界と類似したものであるかや作品内で一貫した世界として描かれているかといった性質であり、Busselle らは読解時に物語の現実性の破綻が検出されたときに没入が阻害されるという仮説を提唱した。図1にBusselleらのモデルの概要を示す。

このモデルにおけるプロセスは読解時に状況モデルが構築されることから始まる。このうち物語世界の構築において重要なのは時間、空間、登場人物に関する各次元のモデルであり、読者はこれらの情報を鮮明に理解するために、意識の中心を現実の世界から物語世界へと移動させる必要があるとする。この移動は個々の言葉の指し示す対象が現実世界から物語世界へと移動する「指示変化」(deictic shift; Duchan, Bruder, & Hewitt, 1995) によってもたらされる。一方でこの過程では物語世界の現実性のモニタリングが常に行われており、これが読解中の没入体験に影響する。ここで、図中の二つの矢印はこの影響過程が二つあ

ることではなく、現実性の破綻が検出された場合とされない場合それぞれにおける影響の内容を示している。すなわち、現実性の破綻が検出されない場合、読者は物語世界をそのまま受容してその中に没入し(図1上の矢印)、その結果楽しみや喜びを体験したり、また物語内容に関する知識や態度の変化といった影響を受けたりする。しかし、状況モデルの構築過程で重大な現実性の破綻が認識された場合(下の矢印)、現実性の詳細な再評価が行われ、それによって破綻が解決されるまで没入は阻害される。

モデルにおける没入の位置付け Busselle and Bilandzic (2008) は物語への没入現象として移入、同一化、フロー体験の3つを例示している。このことから、このモデルにおける没入は先に整理した表1における注意の集中、外界および自己意識の減退、作品のイメージ、同一化、そして物語の現実性を含む概念であると考えられる。そして、没入が起こるメカニズムとして、物語の一貫性の破綻が検出されないことが物語の現実性の知覚につながり、状況モデルの構築や物語世界のイメージ化をスムーズに行うことが可能になると説明する。これによって読者は読解活動に対するフローを体験することができ、同一化はその過程で同時並行的に進むものと理解することができる。そしてこれらは読解時、あるいはその後の楽しみや喜び、知識や態度の変化といった結果をもたら



(Busselle & Bilandzic, 2008, p. 272 より改変)

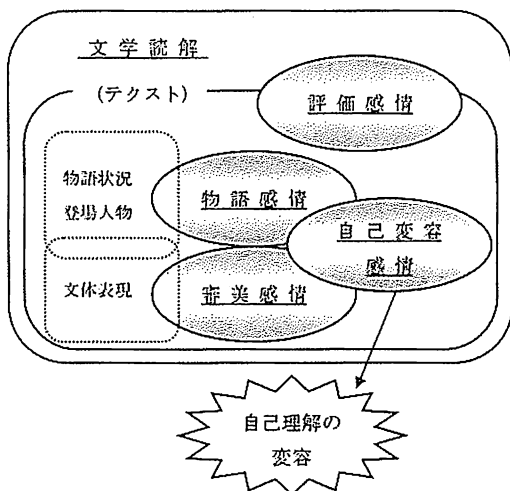
図1 物語理解・関与モデル

すとされている。

3-2 自己変容感情仮説

モデルの概要 これは Miall らの一連の研究によって提唱された、文学作品読解において感情が果たす役割についての仮説である (Kuiken, Miall et al., 2004; Kuiken Phillips et al., 2004; Miall & Kuiken, 2002)。文学読解において読者はさまざまな感情 (feeling) を体験するが、Miall らはそうした感情が読解そのものを支え、また読者に生じるカタルシスや自己理解の変容といった文学的効果をもたらすと主張している。この仮説の全体像を図 2 に示す。

Miall and Kuiken (2002) は読解中に生じる感情をその対象と機能から四つに分類している。まず第 1 は「評価感情」(evaluative feeling) である。これは読みに対する喜びや楽しみといった読解過程全体に関連する感情であり、文学的効果そのものよりも読み活動を支えるものとして機能する。第 2 の「物語感情」(narrative feeling) は物語の出来事や登場人物などの内容に対して抱く共感や感情移入などを指し、第 3 の「審美感情」(aesthetic feeling) は物語文章の文体表現 (比喩やアイロニーなど) に対して生起する感情を意味する。ここで、物語感情は作中の出来事と読者自身の体験の類似によって生じる感情であるが、文学的な文体表現がそこに加わり審美感情が生じることで、



(Kuiken, Miall et al., 2004; Miall & Kuiken, 2002 を参考に筆者らが作成)

図 2 自己変容感情仮説の概念図

読者の体験と類似していない出来事の描写を読むときにも感情が生じ、その感情は自己の体験の新たな側面を暗示するものとして機能するようになる。さらに、こうした感情は作中の他の場面を読んでいるときにも持続して表れたりすることで、自己理解や自己意識の変容を促すものとなる。この感情が第 4 の「自己変容感情」(self-modifying feeling) であり、これが文学的体験の中心を担う感情であるとする。

モデルにおける没入の位置付け この仮説において物語世界への没入について直接的な位置づけはなされていないが、これに関連するのは物語感情であると考えられる。物語感情の中核は登場人物への共感や感情移入であり、これらは物語世界への没入体験の重要な構成要素である。この仮説に従うならば、共感や感情移入は自己理解や自己観の変化を促す役割を持ち、文学作品の読解過程では重要な要素であると考えられる。

3-3 物語理解過程と没入との関係

3-1 と 3-2 ではこれまでに没入現象に関連して提唱されてきた物語読解に関する仮説を取りあげた。しかしこれらのモデルにはいくつかの問題点を指摘できる。まず物語理解・関与モデル (Busselle and Bilandzic, 2008) では状況モデルの構築がプロセスの出発点として位置づけられており、状況モデルと没入とを結ぶ概念として現実性の感覚が挙げられているが、これは Busselle and Bilandzic (2009) では没入の一側面とされていることを考えると、没入と状況モデルとの関係については曖昧さが残る。またこの現実性を支える直示変化がどのように生じるのかについても心理学的な検証を必要とするであろう。こうした意味で、このモデルにおける没入の位置づけは不明瞭といえる。次に、自己変容感情仮説 (Kuiken, Miall et al., 2004; Miall & Kuiken, 2002) では没入が文学的体験の基礎となっていると考えられ、没入体験の役割と効果を考察する上で重要な示唆を与えてくれる仮説である。しかしながら、この仮説では物語理解過程と各感情との関係には触れられておらず、物語理解過程と没入との関連性はあまり明らかになっていない。以上のように、既存のモデルでの物語読解における没入の位置づけは不明瞭と考えられる。

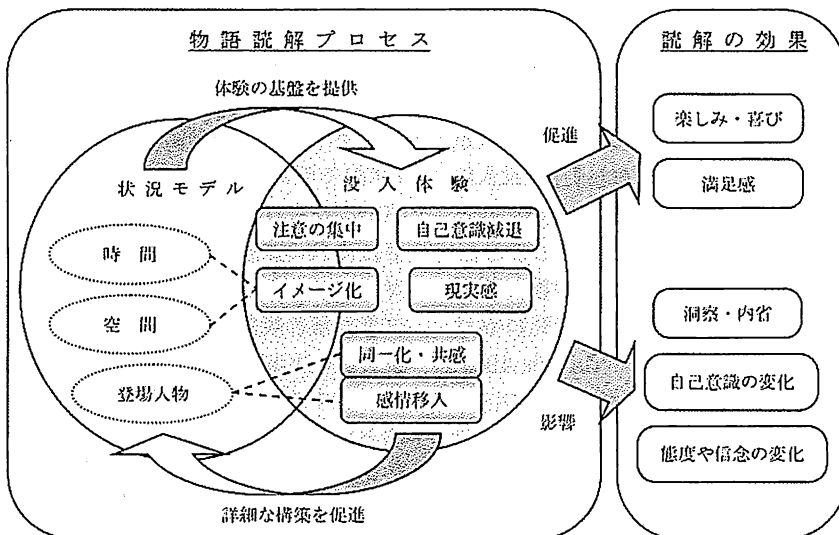
しかしながらこうした両者の関連性については、これまでの心理学的研究からさらに考察することが可能であろう。Zwaan (1999a) は読者が読解過程で自身の体験に極めて近いほどに鮮明な表象を構築することがあると指摘している。これについて Sanford (2008) は読者が常にこのような詳細な表象を構築しているわけではなく、そのような深い処理には身体化認知のメカニズムが働いていると指摘している。ここでいう身体化認知とは、知覚や運動などの内容を含む文章を理解するとき、実際の知覚運動に関する処理系が関与しているとする理論であり(平, 2010)、単語や文、文章など広範なレベルでの言語理解と密接に関連している(Fisher & Zwaan, 2008; 常深・楠見, 2009)。このことから考えると、状況モデルの構築には作品世界の知覚的イメージが貢献している可能性がある。また、物語中の登場人物についての理解はその人物と読者との類似性が高いほど促進されると指摘されているが(Komeda et al., 2009)、この両者の類似性は読解中の共感にも影響している(Komeda et al., 2013)。こうした知見と登場人物への共感が物語理解において大きな役割を果たすという指摘(Komeda & Kusumi, 2006; 米田ら, 2005)を踏まえると、登場人物への共感がその人物情報の理解を促す可能性も考えられる。さらに

物語への没入傾向が高いほど読解時間が短くなる傾向が報告されている(Osanai & Kusumi, 2012)。以上のように考えると、Busselle and Bilandzic (2008)とは逆に没入が物語理解に影響を与えているという関係を仮定することができる。

3-4 物語没入—読解モデル

モデルの概要 3-3での考察から、作品世界のイメージ化や登場人物への同一化は物語読解における状況モデル構築を促進する可能性が示唆された。そこで、これと既存の没入に関する理論とを踏まえて、状況モデルの構築によって没入が生じると同時に、没入することによって状況モデルの構築が促進されるという「物語没入—読解モデル」(narrative immersion-reading model)を提唱する。本モデルの全体像を図3に示す。

本モデルでは、物語読解は大きく分けて状況モデルと物語世界への没入体験という下位要素で構成されていると仮定する。読者の体験するこの過程は、Busselle and Bilandzic (2008)と同様に状況モデルの構築から始まる。状況モデルには時間、空間、登場人物などの各次元が組み込まれており(Zwaan, Langston et al., 1995; Zwaan, Magliano et al., 1995)、これらが表象としての物語世界(Oatley, 1999, 2002)を構成している。一方没入



矢印はそれぞれの概念間の影響の方向を示す。点線は状況モデルの各次元と没入体験の構成要素間のつながりを示す。

図3 没入—物語読解モデルの概念図

体験は注意の集中, 自己意識の減退, 物語世界のイメージ化, 共感/同一化, 感情移入, 物語の現実感という, 2-5 で述べた六つの下位コンポーネントで構成されている。ここで, 読者は状況モデルの構築に注意を集中させるが, 状況モデルは物語世界に関する知覚的情報を含んでおり (Zwaan, 1999a), その過程で物語世界のイメージが形成される。このように両プロセスは独立したものではなく, 状況モデルの構築とともに注意の集中やイメージといった没入のプロセスが進行する。また, 状況モデル内の登場人物に関する情報によってその人物への同一化や感情移入がもたらされ, また同時に外界への気づきの消失や物語への現実感の感覚が生じる。このように, 図3の上矢印が示すように状況モデルは没入体験を支え, それらが生起するための基盤を提供している。一方で図の下矢印が示すように, 没入体験は状況モデルの詳細な構築に貢献する。同一化は登場人物に関する情報の精緻化に, 情景のイメージ化は時間, 空間といった情報の精緻化に主に関連するが, これ以外の次元 (因果関係や目標など) の情報の精緻化にも没入は影響する (たとえば, Komeda & Kusumi, 2006)。こうして精緻化された状況モデルはさらなる没入を促し, 読解中に両者の相互作用が繰り返されることによって読者は作品世界がまるで実世界と同じであるかのような現実感を体験する。さらに, 没入しながらの読みは読解後の満足感や喜び, 楽しみなどを促進する効果を持ち (Green, 2004; Tal-Or & Cohen, 2010), 一方で自己洞察や物語内容に関連した信念などに影響する (Green & Brock, 2000; Kuiken, Miall et al., 2004)。このように, 本モデルは既存の没入に関する理論と物語理解過程とを統合したモデルといえる。

本モデルと各理論との関係性および検討課題
物語没入—読解モデルは, 物語理解研究における状況モデル理論 (van Dijk & Kintsch, 1983; Zwaan & Radvansky, 1998) を基礎としつつ, これに物語世界に没入する体験についての理論を組み合わせて物語読解という総体として理解する枠組みを提案するものである。本モデルに従えば, 3-1 および 3-2 で概説した二つのモデルに新たな説明を与えることができ, これまで明らかにされてこなかった物語読解における没入の役割につい

て実証的な検討を行うことが可能となる。

まず本モデルでは, Busselle and Bilandzic (2008) のモデルにおける没入と状況モデルとの関係に加えて「没入が状況モデル構築を促進する」という関係を仮定することで, 没入は物語理解過程と相互作用するという新たな位置づけを与えた。これによって, 読みによって物語を鮮明に体験できるという現実感が生じるメカニズムを, 没入による状況モデルの精緻化によって説明することができる。また状況モデルの構築にともなうその世界を鮮明に体験するという指摘 (たとえば, Zwaan, 1999a) について実証的な検討を行うことも可能になる。とりわけ, 作品世界表象に含まれる時間や空間, 登場人物といった各次元と没入体験との相互作用については, イベントインデックスモデル (Komeda & Kusumi, 2006; Zwaan, Langston et al., 1995; Zwaan, Magliano et al., 1995) や読者—主人公相互作用モデル (Komeda et al., 2009; 米田・楠見, 2007) の検討で用いられる, 読解時間測定や読後に行う文章の重要度評定課題などを用いて検討することが考えられる。これによって, 状況モデル理論に没入過程を取り入れた, より包括的な読解プロセスの解明が期待できる。

次に, 自己変容感情仮説 (Miall & Kuiken, 2002) についても新たな枠組みから検討が可能である。3-2 で触れたように, Miall らのモデルにおける物語感情は没入のうち同一化や感情移入に相当すると考えられるが, こうした感情が物語理解においてどう生起するかは明らかになっていない。しかし本モデルに従えば, 読解で生じる物語感情を「状況モデル構築と相互作用的に生起した情景イメージや登場人物への同一化」と捉えることができ, これによって文学的体験が読解過程で生じるメカニズムの心理学的検討が可能となる。例えば文学読解の現象学的検討手法 (Kuiken, Phillips et al., 2004; Kuiken, Miall et al., 2004) に従って読者が体験する審美感情や自己変容感情などを言語報告という形で抽出し, これらが没入体験とどのように関連するかを検討したり, 認知心理学的手法を組み合わせて状況モデル構築との関連をみるといった方法が考えられる。こうした統合的研究の試みは, 文学読解を心理学的見地から明らかにすることに大きく貢献するであろう。

さらに、没入と読後の楽しみや喜びといった感情との関連についても新しい視点での検討を提案できる。2-2で触れたように、読後の楽しみと移入との関連については主に質問紙を用いた検討が行われてきたが (Green et al., 2004; Tal-Or & Cohen, 2010)、これらと物語読解の認知メカニズムとの関連はあまり明らかになっていない。本モデルを用いて移入を読解過程で生じるイメージ化や注意の集中と捉えなおすことで、没入のどの側面が楽しみや満足感につながるか、あるいは状況モデルの構築プロセスと読後の効果との関連などについて検討することが可能となり、物語を読むことによる認知的、感情的効果のメカニズムの解明にもつながるといえる。

一方これまでに読書活動に関連して、読書中に生じる感情 (van der Bolt & Tellegen, 1996) や内発的動機づけ (Greaney & Newman, 1990; Naceur & Schiefele, 2005)、読書への興味 (Sadoski, Geotz, & Rodriguez, 2000; Schiefele, 1991) などが検討されているが、こうした概念と没入との関連も今後検討すべき課題であろう。とりわけ動機づけの概念には没入体験が含まれており、読書活動や読解スキルなどへの効果が検討されている (Schiefele et al., 2012)。しかしながらこれらの研究では没入についてあまり論じておらず、状況モデル構築との関連の検討も充分とはいえない。本論文で提案したモデルは動機づけや興味などに直接焦点を当てたものではないが、こうした要素は没入体験と深いつながりを持つことが予想され、本モデルの観点に立つことでそれらと物語読解過程との関連をより直接的に検討できる可能性がある。

以上のような検討は本モデルの諸否について明らかにするだけでなく、物語を読むという行為をより大きな観点から理解することにも寄与し、人間がなぜ物語を作り、また読むことを求めてきたのかという問題にも新たな視点を提供できるであろう。

4. お わ り に： 没入体験研究の今後の展開

本論文では物語読解の過程における物語世界への没入体験に焦点を当て、1. では物語読解と物語

世界の定義づけを行い、2. ではこれまでの研究を概観し、没入という概念がどのような現象を含むかという問題への回答案を提示した。また3. では没入が読解過程においてどのような位置を取りうるかという問題について二つのモデルを考察し、没入傾向と没入体験、そして物語理解過程を統合する物語没入—読解モデルを提唱した。

最後に、物語への没入体験に関連する今後の研究の方向について展望を述べる。冒頭でも触れたように、物語は現実世界や実際の社会的経験のシミュレーションとしての役割を担っているという指摘が近年なされている (Mar & Oatley, 2008; Oatley, 1999, 2011)。これに関連して、言語理解研究においては身体化認知に関する研究が近年活発になり、短文などの読みと身体運動との関連性が指摘されている (Fisher & Zwaan, 2008)。これらは現実世界を体験するように物語が疑似体験されているのではないかと考える上で重要な知見となりうる。一方これまで見てきたように、没入は物語世界を現実世界と同じであるかのように生き生きと体験する現象であり、没入が物語のシミュレーションとしての機能に関与している可能性や、身体化認知が没入体験の基盤となっている可能性は十分に考えられる。また社会神経科学の分野では心の理論などの神経科学的基盤が検討されているが (Amodio & Frith, 2006; Buckner & Carroll, 2007; Frith, 2007)、これらは物語読解における登場人物の理解にとって重要な要素であり、物語理解とその神経基盤を共有していることが指摘されている (Mar, 2011)。さらに、心の理論などの対人的能力は物語の読書量が多いほど高まることや (Kidd & Castano, 2013; Mar et al., 2006, 2009)、物語に移入すると読後の向社会的行動が高まること (Johnson, 2012; Johnson et al., 2013) も報告されている。こうした知見は、物語への没入が同一化を通して登場人物の理解に関与しているという、これまで本論文で考察してきた仮説にも沿うものである。物語への没入による対人的能力の促進について詳細に検討することで、複雑な対人的相互作用場面における社会的スキルや共感能力の獲得支援などに応用することも可能になるであろう。

物語読解における没入研究はまだ発展途上にある研究分野であるが、認知心理学における他の理

論や神経科学の領域などにおける研究と積極的に協働することは、物語読解という営為を理解する上で役立つのみならず、我々が現実世界においてどのようにふるまい、他者と関係を築いているかという問題にも大きな示唆をもたらすものとなるはずである。

謝 辞

本研究は、日本学術振興会の科学研究費補助金（特別研究員奨励費）の助成を受けた。また、執筆に際し貴重な助言をいただいた米田英嗣さん（京都大学）、常深浩平さん（いわき短期大学）、野村弘平さん（大阪大学）に厚く御礼申し上げます。

文 献

- Amodio, D. M., & Frith, C. D. (2006). Meeting of minds: The medial frontal cortex and social cognition. *Nature reviews Neuroscience*, 7, 268-277.
- Baum, D., & Lynn, S. J. (1981). Hypnotic susceptibility level and reading involvement. *International Journal of Clinical and Experimental Hypnosis*, 29, 367-374.
- Bettelheim, B. (1976). *The uses of enchantment: the meaning and importance of fairy tales*. New York: Knopf.
- Bortolussi, M., & Dixon, P. (2003). *Psychonarratology: Foundation for the empirical studies of literary response*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Bower, G. H., Black, J. B., & Turner, T. J. (1979). Scripts in memory for text. *Cognitive Psychology*, 11, 177-220.
- Braun, I. K., & Cupchik, G. C. (2001). Phenomenological and quantitative analyses of absorption in literary passages. *Empirical Studies of the Arts*, 19, 85-109.
- Buckner, R. L., & Carroll, D. C. (2007). Self-projection and the brain. *Trends in Cognitive Science*, 11, 49-57.
- Busselle, R., & Bilandzic, H. (2008). Fictionality and perceived realism in experiencing stories: A model of narrative comprehension and engagement. *Communication Theory*, 18, 255-280.
- Busselle, R., & Bilandzic, H. (2009). Measuring narrative engagement. *Media Psychology*, 12, 321-347.
- Chang, C. (2008). Increasing mental health literacy via narrative advertising. *Journal of Health Communication*, 13, 37-55.
- Cohen, J. (2001). Defining identification: A theoretical look at the identification audiences with media

- characters. *Mass Communication & Society*, 4, 245-264.
- Coplan, A. (2004). empathic engagement with narrative fictions. *Journal of Aesthetics and Art Criticism*, 62, 141-152.
- Csikszentmihalyi, M. (1990). *Flow: The psychology of optimal experience*. New York: Harper & Row.
- 大宮司信・芳賀あい子・笠井 仁 (2000) イメージへの没入性と性格および不安との関連 催眠学研究, 45(1), 24-29.
- Davis, S., Dawson, J. G., & Seay, B. (1978). Prediction of hypnotic susceptibility from imaginative involvement. *American Journal of Clinical Hypnosis*, 20, 194-198.
- de Graaf, A., Hoeken, H., Sanders, J., & Beentjes, J. W. J. (2012). Identification as mechanism of narrative persuasion. *Communication Research*, 39, 802-823.
- Duchan, F. J., Bruder, G. A., & Hewitt, L. E. (1995). *Deixis in narrative: A cognitive science perspective*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Fellows, B. J., & Armstrong, V. (1977). An experimental investigation of the relationship between hypnotic susceptibility and reading involvement. *American Journal of Clinical Hypnosis*, 20, 101-105.
- Fisher, M. H., & Zwaan, R. A. (2008). Embodied language: A review of the role of the motor system in language comprehension. *The Quarterly Journal of Experimental Psychology*, 1, 1-26.
- Freud, S. (1940). Abriß der Psychoanalyse. *Internationale Zeitschrift für Psychoanalyse und Imago*, 25, 7-67. 津田均 (訳) (2007). 精神分析概説. 新宮一成・鷺田清一・道旗泰三・高田珠樹・須藤訓任. フロイト全集 22 (pp. 175-250) 岩波書店.
- Frith, C. D. (2007). The social brain? *Philosophical Transactions of the Royal Society B Biological Science*, 362, 671-678.
- Gerrig, R. J. (1993). *Experiencing narrative worlds*. New Haven, CT: Yale University Press.
- Graesser, A. C., Mills, K. K., & Zwaan, R. A. (1997). Discourse comprehension. *Annual Review of Psychology*, 48, 163-189.
- Graesser, R. A., Singer, M., & Trabasso, T. (1994). Constructing inferences during narrative text comprehension. *Psychological Review*, 101, 371-395.
- Greaney, V., & Newman, S. B. (1990). The functions of reading: A cross-cultural perspective. *Reading Research Quarterly*, 25, 172-195.
- Green, M. C. (2004). Transportation into narrative worlds: The role of prior knowledge and perceived realism. *Discourse Processes*, 38, 247-266.
- Green, M. C., & Brock, T. C. (2000). The role of transportation in the persuasiveness of public narratives.

- Journal of Personality and Social Psychology*, 79, 701-721.
- Green, M. C., & Brock, T. C. (2002). In the mind's eye: Transportation-imagery model of narrative persuasion. In M. C. Green, J. J. Strange, & T. C. Brock (Eds.) *Narrative impact: Social and cognitive foundations*. (pp.316-341). Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum.
- Green, M. C., & Brock, T. C., & Kaufman, G. F. (2004). Understanding media enjoyment: The role of transportation into narrative worlds. *Communication Theory*, 14, 311-327.
- Green, M. C., & Carpenter, J. M. (2011). Transporting into narrative worlds: New directions for the scientific study of literature. *Scientific Study of Literature*, 1, 113-122.
- Hilgard, E. R. (1965). *Hypnotic susceptibility*. New York: Harcourt, Brace & World.
- 井関龍太 (2004) テキスト理解におけるオンライン処理メカニズム —— 状況モデル構築過程に関する理論的概観 —— *心理学研究*, 75, 442-458.
- Iser, W. (1976). *Der akt des lesens: Theorie asthetischer Wirkung*. München: Wilhelm Fink Verlag. 轡田収 (訳) (1982). 行為としての読書 —— 美的作用の理論 ——. 岩波書店.
- Johnson, D. R. (2012). Transportation into a story increases empathy, prosocial behavior, and perceptual bias toward fearful expressions. *Personality and Individual Differences*, 52, 150-155.
- Johnson, D. R., Cushman, G. K., Borden, L. A., & McCune, M. S. (2013). Potentiating empathic growth: Generating imagery while reading fiction increases empathy and prosocial behavior. *Psychology of Aesthetics, Creativity, and the Arts*, 7, 306-312.
- Johnson-Laird, P. N. (1983). *Mental models: towards a cognitive science of language, inference, and consciousness*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Keen, S. (2006). A theory of narrative empathy. *Narrative*, 14, 207-236.
- Kidd, D. C., & Castano, E. (2013). Reading literary fiction improves theory of mind. *Science*, 342, 377-380.
- Kneepkens, E. M. E. W., & Zwaan, R. A. (1994). Emotions and literary text comprehension. *Poetics*, 23, 125-138.
- Komeda, H., Kawasaki, M., Tsunemi, K., & Kusumi, T. (2009). Differences between estimating protagonists' emotions and evaluating readers' emotions in narrative comprehension. *Cognition & Emotion*, 23, 135-151.
- Komeda, H., & Kusumi, T. (2006). The effect of protagonist's emotional shift on situation model construction. *Memory & Cognition*, 34, 1548-1556.
- 米田英嗣・楠見 孝 (2007) 物語理解における感情過程 —— 読者-主人公相互作用による状況モデル構築 —— *心理学評論*, 50, 163-179.
- 米田英嗣・仁平義明・楠見 孝 (2005) 物語読解における読者の感情 —— 予感, 共感, 違和感の役割 —— *心理学研究*, 75, 479-486.
- Komeda, H., Tsunemi, K., Inohara, K., Kusumi, T., & Rapp, D. N. (2013). Beyond disposition: The processing consequences of explicit and implicit invocations of empathy. *Acta Psychologica*, 142, 349-355.
- 小森めぐみ (2012) 物語への移入が物語関連製品への広告評価に及ぼす影響 —— 小説と映像を用いた検討 —— *武蔵野大学人間科学研究年報*, 1, 79-90.
- Kuiken, D., Miall, D. S., & Sikora, S. (2004). Forms of self-implication in literary reading. *Poetics Today*, 25, 171-203.
- Kuiken, D., Phillips, L., Gregus, M., Miall, D. S., Verbitsky, M., & Tonkonogy, A. (2004). Locating self-modifying feelings within literary reading. *Discourse Processes*, 38, 267-286.
- Mandler, J. M. (1982). Recent research on story grammars. In J. F. Le Ny, & W. Kintsch (Eds.) *Language and comprehension*. (pp.207-218). Amsterdam: North Holland.
- Mandler, J. M., & Johnson, N. S. (1977). Remembrance of things parsed: Story structure and recall. *Cognitive Psychology*, 9, 111-151.
- Mar, R. A. (2011). The neural bases of social cognition and story comprehension. *Annual Review of Psychology*, 62, 103-134.
- Mar, R. A., & Oatley, K. (2008). The function of fiction is the abstraction and simulation of social experience. *Perspectives on Psychological Science*, 3(3), 173-192.
- Mar, R. A., Oatley, K., Hirsh, J., dela Paz, J., & Peterson, J. B. (2006). Bookworms versus nerds: Exposure to fiction versus non-fiction, divergent associations with social ability, and the simulation of fictional social worlds. *Journal of Research in Personality*, 40, 694-712.
- Mar, R. A., Oatley, K., & Peterson, J. B. (2009). Exploring the link between reading fiction and empathy: Ruling out individual differences and examining outcomes. *Communications*, 34, 407-426.
- Mazzocco, P. M., Green, M. C., Sasota, J. A., & Jones, N. W. (2010). This story is not for everyone: Transportability and narrative persuasion. *Social Psychology and Personality Science*, 1, 361-368.
- McFerran, B., Dahl, D. W., Gorn, G. J., & Honea, H.

- (2010). Motivational determinants of transportation into marketing narratives. *Journal of Consumer Psychology*, 20, 306-316.
- Merckelbach, H., Horselenberg, R., & Muris, P. (2001). The Creative Experience Questionnaire (CEQ) : A brief self-report measure of fantasy proneness. *Personality and Individual Differences*, 31, 987-995.
- Miall, D. S. (1988). Affect and narrative : A model of response to stories. *Poetics*, 17, 259-272.
- Miall, D. S. (1989). Beyond the schema given : Affective comprehension of literary narratives. *Cognition and Emotion*, 3, 55-78.
- Miall, D. S., & Kuiken, D. (1995). Aspects of literary response : A new questionnaire. *Research in the Teaching of English*, 29, 37-58.
- Miall, D. S., & Kuiken, D. (2002). A feeling for fiction : Becoming what we behold. *Poetics*, 30, 221-241.
- Naceur, A., & Schiefele, U. (2005). Motivation and learning—the role of interest in construction of representation of text and long-term retention : inter- and individual analysis. *European Journal of Psychology of Education*, 29, 155-170.
- Nell, V. (1988). *Lost in a book : Psychology of reading for pleasure*. New Haven : Yale University Press.
- Oatley, K. (1995). A taxonomy of the emotions of literary response and a theory of identification in fictional narrative. *Poetics*, 23, 53-74.
- Oatley, K. (1999). Why fiction may be twice as true as fact : Fiction as cognitive and emotional simulation. *Reviews of General Psychology*, 3, 101-117.
- Oatley, K. (2002). Emotions and the story worlds of fiction. In M. C. Green, J. J. Strange, & T. C. Brock (Eds.) *Narrative impact : Social and cognitive foundations*. (pp.39-69) Mahwah, NJ : Lawrence Erlbaum.
- Oatley, K. (2011). *Such stuff as dreams : The psychology of fiction*. Chichester : Wiley-Blackwell.
- O'Brien, E. J., & Myers, J. L. (1994). Text comprehension : A view from the bottom up. In S. R. Goldman, A. C. Graesser, & P. van den Broek (Eds.) *Narrative comprehension, causality, and coherence : essays in honor of Tom Trabasso*. (pp.35-53). Mahwah, NJ : Lawrence Erlbaum Associates.
- Olson, M. W., & Gee, T. C. (1988). Understanding narratives : A review of story grammar research. *Childhood Education*, 64, 302-306.
- Osanai, H., & Kusumi, T. (2012, July). *The effects of individual differences of absorption on narrative comprehension*. Poster presented at the 22nd Annual Meeting of the Society for Text and Discourse, Montreal, Canada.
- 小山内秀和・岡田 斉 (2011). 物語理解に伴う主観的体験を測定する尺度 (LRQ-J) の作成 心理学研究, 82, 167-174.
- Radvansky, G. A. (2012). Across the event horizon. *Current Directions in Psychological Science*, 21, 269-272.
- Roche, S. M., & McConkey, K. M. (1990). Absorption : Nature, assessment, and correlates. *Journal of Personality and Social Psychology*, 59, 91-101.
- Sadoski, M., Geotz, E. T., & Rodriguez, M. (2000). Engaging texts : effects of concreteness on comprehensibility, interest, and recall in four text types. *Journal of Educational Psychology*, 92, 85-95.
- 阪本一郎 (1971) 現代の読書心理学 金子書房.
- 坂本真士 (1997) 自己注目と抑うつの社会心理学 東京大学出版会.
- Sakamoto, S. (1998). The preoccupation scale : Its development and relationship with depression scales. *Journal of Clinical Psychology*, 54, 645-654.
- Sanford, A. J. (2008). Defining embodiment in understanding. In M. de Vega, A. M. Glenberg, & A. C. Graesser (Eds.) *Symbols and embodiment : Debates on meaning and cognition*. (pp.181-194). New York : Oxford University Press.
- Sanford, A. J., & Emmott, C. (2012). *Mind, brain and narrative*. Cambridge : Cambridge University Press.
- 佐々木良輔 (1998) 「思いやりの気持ち」に与える読書の影響 読書科学, 42, 47-59.
- Schiefele, U. (1991). Interest, learning and motivation. *Educational Psychologist*, 26, 299-323.
- Schiefele, U., Schaffner, E., Möller, J., & Wigfield, A. (2012). Dimensions of reading motivation and their relation to reading behavior and competence. *Reading Research Quarterly*, 47, 427-463.
- Segal, E. M. (1995). A cognitive-phenomenological theory of fictional narrative. In J. F. Dunchan, G. A. Bruder, & L. E. Hewitt (Eds.) *Deixis in narrative : A cognitive science perspective*. (pp.61-78). Hillsdale, NJ : Lawrence Erlbaum Associates.
- 平 知宏 (2010) 比喩理解と身体化認知. 楠見 孝 (編) 現代の認知心理学 3 —— 思考と言語 —— (pp. 245-269) 北大路書房.
- Tal-Or, N., & Cohen, J. (2010). Understanding audience involvement : Concept and manipulating identification and transportation. *Poetics*, 38, 402-418.
- Tellegen, A., & Atkinson, G. (1974). Openness to absorbing and self-altering experiences ("Absorption"), a trait related to hypnotic susceptibility. *Journal of Abnormal Psychology*, 83, 268-277.
- Thorndyke, P. W. (1977). Cognitive structures in comprehension and memory of narrative. *Cognitive Psychology*, 9, 77-110.
- 常深浩平・楠見 孝 (2009) 物語理解を支える知覚・

- 運動処理——疑似自伝的記憶モデルの試み——
心理学評論, 52, 529-544.
- van der Bolt, L., & Tellegen, S. (1996). Sex difference in intrinsic reading motivation and emotional reading experience. *Imagination, Cognition and Personality*, 15, 337-349.
- van Dijk, T. A., & Kintsch, W. (1983). *Strategies of discourse comprehension*. New York: Academic Press.
- Wigfield, A., & Guthrie, J. T. (1997). Relations of children's motivation for reading to the amount of breadth of their reading. *Journal of Educational Psychology*, 89, 420-432.
- Wild, T. C., Kuiken, D., & Schopflocher, D. (1995). The role of absorption in experiential involvement. *Journal of Personality and Social Psychology*, 69, 569-579.
- Williams, J. H., Green, M. C., Kohler, C., Allison, J. J., & Houston, T. K. (2010). Stories to communicate risks about tobacco: Development of a brief scale to measure transportation into a video story—The ACCE Project. *Health Education Journal*, 70, 184-191.
- Wilson, S. C., & Barber, T. X. (1983). Fantasy-prone personality: Implications for understanding imagery, hypnosis and parapsychological phenomena. In A. A. Sheikh (Ed.) *Imagery: current theory, research, and application*. (pp. 340-387). New York: Willy.
- Wollheim, R. (1974). Identification and imagination. In R. Wollheim (Ed.) *Freud: A collection of critical essays*. (pp. 172-195). New York: Anchor.
- 與謝野晶子 (1971) 全訳源氏物語 (中) 角川書店.
- Zunshine, L. (2006). *Why we read fiction: Theory of mind and the novel*. Columbus, OH: Ohio State University Press.
- Zwaan, R. A. (1999a). Embodied cognition, perceptual symbols, and situation models. *Discourse Processes*, 28, 81-88.
- Zwaan, R. A. (1999b). Five dimensions of narrative comprehension: the event indexing model. In S. R. Goldman, A. C. Graesser, & P. van den Broek (Eds.) *Narrative comprehension, causality, and coherence: Essays in honor of Tom Trabasso*. (pp. 93-110). Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Zwaan, R. A., Langston, M. C., & Graesser, A. C. (1995). The construction of situation models in narrative comprehension: An event-indexing model. *Psychological Science*, 6(5), 292-297.
- Zwaan, R. A., Magliano, J. P., & Graesser, A. C. (1995). Dimensions of situation model construction in narrative comprehension. *Journal of Experimental Psychology*, 21, 386-397.
- Zwaan, R. A., & Radvansky, G. A. (1998). Situation models in language comprehension and memory. *Psychological Bulletin*, 123, 162-185.

— 2013. 3. 14 受稿, 2013. 11. 12 受理 —